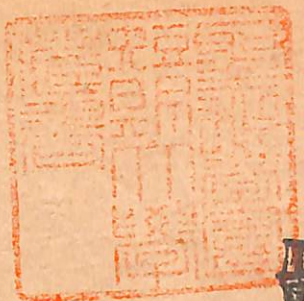


奥の保そ道



たぐのはろ道



たぐ  
はろ  
道



たぐ  
はろ  
道



奥の保そ道

玉田活版所

翁姓ハ松尾名ハ忠右工門伊賀上野藤堂某ノ近臣ナリ一  
年故アリテ故郷ヲ立出洛ニ上リ吟叟ニ游學スルヲ七年  
寛文ノ末ツカタ東武ニ下リ礪川ノ水道修成備夫トナリ  
テ功ヲ終ルノ頃薙髮シテ風羅坊トイフ深川ニ庵ヲ結ヒ  
自ラ芭蕉ヲ植テ樂ム是ヨリ世舉テ芭蕉庵ト稱ス又泊船  
堂無名庵蓑虫庵瓢中庵ノ諸號アリ素ヨリ學識宏博氣象  
飄逸古今風流不世出ノ人ナリ且禪意ヲ佛頂老師ニ悟リ  
畫法ヲ森許六ニ得タリ當時ソノ雅ニ歸依スル人少シト  
セス何レノ年ニカ有ケン石山ノ奥ニ客居シテ姑ク幻住  
庵ノ幽閑ヲ樂ム貞享四年ノ秋鹿嶋ノ吟行アリ同五年杜  
國ヲ鶻テ大和ニ游ヒ元祿二年曾良ヲ率テ陸奥ニ旅ス同

七年ノ秋ハ翁伊賀ニ在シカ浪花ヨリ招モアレハ奈良ノ  
重陽ヲカケテ赴ントテ支考惟然ヲ伴ヒ步ヲ進テ風游ス  
ルノ日痢ヲ患テ大坂御堂前花屋仁左工門カ後園ニ伏ス  
病中ノ吟旅ニヤンテ夢ハ枯野ヲカケマハル是風詠ノ終  
也終ニ七日ヲ過テ歿ス年五十有一鳴呼悲哉此叟ヒトタ  
ヒ江左ニ龍舉シテヨリ始テ自然ノ妙ヲ開キ遂ニ俳諧ヲ  
シテ美ヲ詩歌ニ競ハシム光前人ヲ蔽ヒ澤后代ニ垂ル其  
句正變一ナラス然ルヲ後進察セス其平々タル者ヲ取テ  
以テ三昧ト爲ス歎スヘシ宗祇宗長掛河ノ城ニ於テ灰書  
ノ俳諧モ發句舉句トイフ事モナク只言捨ナリ宗鑑守武  
等、大築波集飛梅二句ヲ撰フト雖モ未タ一坐ノ準繩モ立  
サリケルヲ松永貞徳一タヒ九重ヨリ御免許ヲ蒙リテヨ

リ其式大率定マル時ニ難波ノ宗因古風ヲ看破シ新躰發  
 起シテ一時ノ洒落ニ人ヲ絶倒セシム是ヲ談林ト稱ス翁  
 イマダ宗房マリシコロフノ風ニ游ンテ上手ノ聞ユアリ  
 シカ聊カ眼ヲ開キテ次韵集ヲ撰ヒ稍談林ヲ離レントス  
 ル根サシ見ユ遂ニ杜律ノ風骨ヲ探リ山家集ノ寂寥ヲダ  
 トリ往シ幽玄ノ体ニ人情ノ理屈ヲ離ルサレハ正風爰ニ  
 大成シテ天下後世コヅツテ俳階中興ノ大祖ト稱譽セラ  
 ル、モ宜ナル哉看ヨ我カ東北ノ俳友奥ノ細道ニ遊ハレ  
 タル祖翁ノ深情今昔モ其事跡符合至レリ盡セリ感スル  
 ニ絶タリ

仙臺

千歲園一叟誌



## れくのはろ道

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也舟の上  
 生涯をうかへ馬の口どらねて老をむかふる物は日々  
 旅にして旅を栖とす古人も多く旅に死せるあり予も  
 つれの年よりか行雲の風にさうはれて漂泊の思ひやま  
 す海濱にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を  
 らひてや、年も暮春立る霞の空に白川の關こねんとそ  
 ろろ神の物につきて心をくろはせ道祖神のまねさにあ  
 ひて取もの手につかすも、引の破をつくり笠の緒付か  
 えて三里に灸すゆるより松嶋の月先心にかゝりて住る

方は人に譲り松風と別野に移るに

草の戸も住替る代そひなの家

面は句を庵の柱に懸置彌生も末の七日明ほのく空臈々  
として月は有明にて光ねさまれる物すから不二の峯幽  
に見ねて上野谷中の花の梢又いつかはと心ほそしむつ  
ましきかきりは宵よりつとひて舟に乗て送る千じゆと  
云所にて船をあかれは前途三千里のをもひ胸にふさか  
りて幻のちまたに離別の涙をそくく

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として行道なほすくまず人々は途中に立

ならひて後かけのみゆる道はと見送るなるへしことし  
元祿二とせにや奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたち  
て吳天に白髪の恨を重ぬといへ共耳にふれてはいまた  
目に見ねさかい若生て飯らはと定なき頼の末をかけ其  
日漸早加と云宿にたどり着にけり瘦骨の肩にかゝれる  
物先くるしむ只身すからにと出立侍を紙子一衣は夜の  
防きゆかた雨具墨筆のたくひあるはさりかたき饑など  
したるはさすかに打捨かたくて路次の頬となれるみう  
わりなけれ

寶の八島に詣す同行曾良か曰此神は木の咲花や姫の神

と申て富士一躰也無戸室に入て焼玉ふちかひのみ中よ  
 火火出見のみこと生れ玉ひえより寶の八嶋と申又煙を  
 讀習し侍るもこの謂也將ふのしろといふ魚を禁す縁記  
 の旨世お傳ふ事も侍りし

卅日日光山の麓に泊るあるしの云けるやう我名を佛五  
 左衛門と云唯正直を旨とする故に人からは申侍まし一  
 夜の草の枕も打解て休み玉へと云いかなる佛の濁世塵  
 土に示見してかゝる桑門の乞食順禮ことさの人をたす  
 け玉ふにやどあるしのなす事に心をとくめて見るに唯  
 無智無分別にして正直偏固の者なり剛毅木訥の仁に近

きたくひ氣稟尤も尊ふへし

卯月朔日御山に詣拜す往昔此御山を二荒山と書しを空  
 海大師開基の時日光と改玉ふ千歳未來をさとり玉ふに  
 や今此御光天下にかゝりて恩澤八荒にあふれ四民安  
 堵の栖穩なり猶憚多くて筆をさし置ぬ

あらたうと青葉若葉の日の光

黒髮山は霞かゝりて雪はまた白し

剃捨て黒髮山に衣更 曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり芭蕉の下葉に軒を  
 ならへて予か薪水の勞をたすくこのたび松しを象潟の

眺共にせん事を悦ひ且つ羈旅の難をいたはらんと旅立  
曉髪を剃て黒染にさまをかじ惣五を改て宗悟とす仍て  
黒髮山の句有衣更の二字力ありて聞ゆ

廿餘丁山を登つて瀧あり岩洞の頂より飛流して百尺千  
岩の碧潭に落たり岩窟に身をひそめ入て瀧の裏より見  
れはうらみの瀧と申傳に侍る也

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒羽根と云所に知人あれは是より野越にかゝり  
て直道をゆかんとす遙に一村を見かけて行に雨降日暮  
る農夫の家に一夜をかりて明れば又野中を行ふこに野

飼の馬あり草刈をのこになけきよれば野夫といへども  
さすかに情しらぬには非すいか、すへきやされども此  
野は縦横にわかれてうゝ敷旅人の道ふみたからんあ  
やしう侍れば此馬のど、まゐる所にて馬を返し玉へどか  
し侍ぬちいさきものふたり馬の跡したひてはまゐる獨は  
小姫にて名をかさぬと云聞なれぬ名のやさしかりけれ  
は

かさぬとは八重撫子の名なるへし 會良

頓て人里に至れば價ひを鞍つはに結付て馬を返しぬ

黒羽の館代淨坊寺何かしの方に音信る思かけぬあるし

れくのほろ道

の悦ひ日夜語つゝけて其弟桃翠など云か朝夕勤とふら  
 ひ自の家にも伴ひて親屬の方にも招かれ日を経るまゝ  
 にひと日郊外に逍遙して犬逐物の迹を一見し那須の篠  
 原をわけて玉藻の前の古墳をとふるれよりは八幡宮に  
 詣與市扇の的を射し時別しては我國氏神正八幡とちか  
 ひんも此神社にて侍と聞は感應殊にしきりに覺ゆるる  
 暮れは桃翠宅に飯る 修現光明寺と云有るこにまねか  
 れて行者堂を拜す

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のをくに佛頂和尚山居跡あり

堅横の五尺にたらぬ草の庵

むすふもくやし雨なかりせは

と松の炭して岩に書付侍りといつうや聞に玉ふ其跡見  
 んと雲岸寺に杖を曳は人々すゝんて共にいさなひ若き  
 人をほく道のほど打さぬきてをほねす彼麓に至る山は  
 をくあるけしきにて谷道遙に杉黒く苦したゝりて卯月  
 の天今猶寒し十景盡る所橋をわたりにて山門に入  
 さてかの途路道はいつくのはとみやと後の山によちの  
 ほれは石上の小庵岩窟よむすひかけたり妙禪師の死關  
 法雲法師の石室を見るか如し



木啄も庵はやふらず夏木立

とどりやへぬ一句を柱に残しぬ是より殺生石に行館代  
より馬にて送らる此口付のをのこ短冊得させよと乞や  
さしき事を望侍るものかまじ

野を横に馬牽むけよ郭公

殺生石は温泉の出る山陰にあり石の毒氣いまたほろひ  
す蜂蝶のたくひ真砂の色の見ぬほどかさなり死す又  
清水なかるゝの柳は蘆野の里にありて田の畔に残す此  
所の郡守戸部某の此柳見せはやなど折くにの玉ひ聞え  
玉ふをいつくのはとにやと思ひしを今日此柳のかけに

こそ立より侍へれ

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かす重るまゝに白川の關にかゝりて旅心定  
りぬいかて都へと便求しも斷なり中にも此關は三關の  
一にして風騒の人心をど、む秋風を耳に残し紅葉を俤  
にして青葉の梢猶あはれなり卵の花の白妙にいはらの  
花の咲そひて雪にもこゆる心地うする古人冠を正し衣  
裳を改し事など清輔の筆にもどめ置れしとそ

卵の花をかさしに關の晴着かな

會良

とかくして越行まゝにあふくま川を渡る左に會津根高

れくのほろ道

く右に岩城相馬三春の庄常陸下野の地をさかひて山つ  
らなるかけ 所を行に今日は空曇て物影うつらす須か  
川の驛に等窮といふものを尋て四五日とくめらる先白  
河の關いかにこねつスやと問長途のくるしみ身心つか  
れ且は風景に魂うは、れ懐舊に腸を断てはるくしう思  
ひめぐらす

風流の初やをくの田植うた

無下にふねんもさすかにと語れは脇第三とつゝけて三  
卷となすぬ此宿の傍に大きな栗の木蔭をたのみて世  
をいとふ僧有椽ひろふ太山もかくやと覺られてものに

安積山

書付侍る其詞 栗と云文字は西の木と書て西方浄土に  
便ありと行基菩薩の一生杖にも此木を用玉ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮か宅を出て五里計檜皮の宿を離れてあさか山あり  
路より近し此あたり沼多しかつみ刈頭もや、近ふなれ  
はいつれの草を花かつみとは云かど人々に尋侍れども  
更に知る人なし沼を尋人にとひかつみくと尋ありきて  
日は山の端にかゝりぬ二本松より右にされて黒塚の岩  
屋一見し

安積沼

黒塚

しのぶもぢぢ

福嶋に宿るあくれはしのぶもち摺の石を尋て忍ぶの里

れくのほろ道

に行遙山陰の小里に石半は土に埋てあり里の童への來りて教ける昔は此山の上に侍しを人の麥草をあらして此石を試侍るをにくみて此谷につき落せは石の面下さまにふしたりと云さもあるへき事にや

早苗とる手もとや昔しのふ摺

月の輪の渡を越て瀬の上と云宿に出つ佐藤庄司か舊跡は左の山際一里計にあり飯塚の里鯖野と聞て尋く行に丸山と云に尋あたる庄司か舊館なり麓に大手の跡と人の教るに任せて泪を落し又かたはらの古寺に一家の石碑を残す中にも二人の嫁かしるま先哀れなり女なれ

ともかひくしき名の世に聞江つる物かなど袂をぬらしぬ墮涙の石碑も遠きにあらず寺に入て茶を乞へは爰に義經の太刀辨慶か笈をとめて什物とす

笈も太刀も五月にかされ昏幟

五月朔日の事なり其夜飯塚にとまゐる温泉あれば湯に入て宿をかるに土坐に藁を敷ておやしき貧家なり灯もなければはるりの火かけに寐所をもうけて臥す夜に入て雷鳴雨しきりに降て臥る上より洩り蚤蚊にさされて眠らす持病さへをこりて消入計りになん短夜の空もやうく明れば又旅立ぬ猶夜の餘波心すまます馬かりて桑折

## 寶方の塚

の驛に出る遙なる行末をか、にて斯る病覺東なしといへど羈旅邊土の行脚捨身無常の觀念道路にしなん是天の命なりと氣力聊かどり直し路縦横に踏て伊達の大木戸をこす鎧榻白石の城を過笠島の郷ふ入れは藤中將寶方の塚はいつくのほどならんと人にどへは是より遙右に見ゆる山際の里をみのわ笠島と云道祖神の社かた見の薄今にありと教ゆ此頃の五月雨に道などあしく身疲れ侍ればよそなから眺やりて過るに簀輪笠島も五月雨の折にふれたりど

笠嶋はいつこを月のぬかかり道

## かたみのかたみ

岩沼に宿る

## 武隈の松

武隈の松にこそ目覺る心地はずれ根は土際より二木にわかれて昔の姿うしなはずとしらる先能因法師思ひ出往昔陸奥守にて下りし人此木を伐て名取川の橋抗にせられたる事などおれはにや松は此なひ跡もなしとは詠たり代々あるは伐あるひは枕繼などせしと聞に今將千歳のかたちどりのほひてめてたき松のけしきになん侍りま

武隈の松みを申せ遅櫻

と舉白と云もの、餞別したりければ

名取川

櫻より松は二木を三月越し

名取川も渡りて仙臺に入あやめふく日や旅宿をもどめて  
四五日逗留す爰に書工加右衛門と云ものあり聊心ある  
者と聞て知る人になるこの者年頃さたかならぬ名とこ  
ろを考置侍ればとて一日案内す宮城野の萩茂りあひて  
秋の氣色思ひやらるゝ玉田横野つゝじか岡はあをひ咲  
ころなり日影ももらぬ松の林に入て爰を木の下と云と  
う昔もかく露ふかければこそみさむらひ三笠とはよみ  
たれ薬師堂天神の御社など拜て其日はくれぬ猶松嶋鹽  
かまの所々書に書て送る且紺の染結つけたる草鞋二足

宮城野

玉田横野  
つゝじか岡

木の下

すされはあう風流のしれもの爰に至りて其實を顯す

あやめ草足に結はん草鞋の緒

この畫圖にまかせてたどり行はれくの細道の山際に十  
符の菅あり今も年々十符の菅搦を調て國守に獻すと云  
り

十符の菅

壺碑

市川村多賀城に有

土壺のいしづみ

つほの石ふみは高さ六尺餘横三尺計歟昔を穿て文字幽  
也四維國界之數里をしるす此城神龜元年按察使鎮守將  
軍大野朝臣東人之所置也天平寶字六年參議東海東山節  
度使同將軍惠美朝臣獨修造而十二月朔日と有聖武皇帝

れくのはそ道

の御時に當れりむかしより讀置るゝ歌枕をほく語り傳  
 おといへども山崩川落て道あたらたまり石は埋て土にか  
 くれ木は老て若木にかわれは時移り代變して其跡たし  
 かならぬ事のみを爰に至りて疑なき千歳の記念今眼前  
 に古人の心を閱す行脚の一徳存命の悦ひ羈旅の勞をわ  
 すれて涙も落るはかり也それより野田の玉川沖の石を  
 尋ね末の松山は寺を造て末松山といふ松のあひく皆墓  
 はらにてはねをかはし枝をつぬる契の末も終はかくの  
 ことき悲みさも増りて鹽釜の浦に入相のかねを聞五月  
 雨の空聊かはれて夕月夜幽に籬か嶋もほど近し海士の

野田の玉川  
 沖の石  
 末の松山

まがきが島

塩がま

こきつれて肴わかつ聲くにつなてかなしもどよみけん  
 心もしられていと哀也其夜目盲法師の琵琶をならし  
 て奥上るりと云ものをかたる平家にもあらず舞にもあ  
 らずひなひたる調子うち上て枕ちかうかしましけれと  
 さすかに邊土の遺風忘れさるものから殊勝に覺らる早  
 朝鹽竈の明神に詣國守再興せられて宮柱ふとしく彩椽  
 きらひやかに石の階九仞に重り朝日あけの玉かきをか  
 りやかす道の果塵土の境さて神靈あらたにましますあ  
 り我國の風俗なれといと貴けれ神前に古き寶燈ありか  
 ねの戸ひらの面に文治三年和泉三郎寄進とあり五百年

れくのはる道

來の佛今日の前にうかひてこゝろに珍し渠は勇義忠孝  
 の士なり佳命今に至りてしたはすといふ事なし誠に人  
 能道を勤め義を守へし名も亦是にしたかふと云り日既  
 に午にちかし船をかりて松嶋にわたす其間三里餘雄嶋  
 の磯につく

抑よどふりにたれど松嶋は扶桑第一の好風にして凡洞  
 庭西湖に耻を東南より海を入れて江の中三里浙江の潮を  
 たふ嶋の數を盡して歌ものは天を指しふすものは  
 波に匍匐あるは二重にかさなり三重に疊みて左にわか  
 れ右につらなる負るあり抱けるあり兒孫愛すか如し松

の縁こまやかに枝葉汐風に吹たはめて屈曲をのつから  
 ためたるかことし其氣色甯然として美人の顔を粧ふち  
 はや振神のむかし大山すみのなせるわさにや造化の天  
 工いつれの人か筆をふるひ詞を尽さん

雄嶋か磯は地つゞきて海に出たる島なり雲居禪師の別  
 室の跡坐禪石などあり將松の木陰に世をいとふ人も稀  
 く見え侍りて落穂松笠など打けふりたる草の庵閑に住  
 なしいかゝる人とはしられすなから先なつかしく立寄  
 ほとに月海にうつりて晝のなかめ又あらたむ江上に飯  
 りて宿を求めは窓をひらき二階を造て風雲の中に旅寐

するころあやしきまで妙なる心地はせらるれ

松島や鶴に身をかれほどきす 曾良

予は口をどちて眠らんと去ていねられず舊庵をわかる  
、時素堂松嶋の詩あり原安適松かうらしまの和歌を贈  
らる袋を解て今宵の友とす且杉風濁子か發句あり

あねはの松  
緒絶の橋

十一日瑞岩寺に詣當寺三十二世の昔眞壁の平四郎出家  
して入唐飯朝の後開山す其後に雲居禪師の徳化に依て  
七堂葺改りて金壁莊嚴光を輝す佛土成就の大伽監とは  
なれりける彼の見佛聖の寺はいつくにやとしたはる  
十二日平和泉と心さしあねはの松緒絶の橋など聞傳て

金華山

袖のわたり  
尾ふちの牧  
まのかや

人跡稀に難免芻藁の往かふ道をこたもわかす終に路ふ  
みたかえて石の巻といふ湊に出こかね花咲とよみて奉  
たる金花山海上に見わたし數百の廻船入江おつとひ人  
家地をあらうひて竈の烟立つけたり思ひかけす斯る  
所にも來れる哉と宿からんとすれと更に宿かす人なし  
漸く事しき小家に一夜をあかして明れは又しらぬ道を  
よひ行袖のわたり尾ふちの牧まのかや原などよろめ  
に見て遙なる堤を行心細き長沼にそふて戸伊麻と云所  
に一宿して平泉に至る其間廿餘里ほどをほゆ  
三代の榮耀一睡の中に去て大門の跡は一里もなたに有

れくのほろ道



衣が関

り秀衡か跡は田野に成て金鷄山のみ形は残す先高館に  
のはれは北上川南部より流る、大河也衣川は和泉か城  
をめぐりて高館の下にて大河に落入泰衡等か舊迹は衣  
か關を隔て南部口をさし堅め夷をふせくと見へたり偕  
も義臣すくつて此城にこもり功名一時の叢となる國破  
れて山河あり城春にして草青みたりと笠打敷て時のう  
つるさて泪を落し侍りぬ

夏草や兵どもの夢の跡

卯の花に窓房みゆる白毛かな 曾良

兼て耳驚したる二堂開帳す經堂は三將の像をのこし光

堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す七寶散うせて珠  
の扉風にやふれ金の柱霜雪に朽て既に頽廢空虚の叢と  
成へきを四面新に開て藁を覆て風雨の凌暫時千歳の紀  
念とはなれり

五月雨の降のこしてや光堂

小黒崎  
みつの小島

南部道遙に見やりて岩手の里に泊る小黒崎みつの小嶋  
を過てなるこの湯より尻前の關にかゝり出羽の國に越  
んず此路旅人稀なる所なれば關守にあやしめられて漸  
として關をこす大山をのほりて日既に暮れば封人の家  
を見うけて舍を求む三日風雨あれてよしなき山中に逗

留す

蚤虱馬の尿する枕もと

あるし云是より出羽の國に大山を隔て道定か成されは  
道しるへの人を頼て越へき由を申さらはと云て人を頼  
み侍れは究竟の若者反脇指を横たに檜の杖を構て我  
か先に立て行けふもを必あやうき目にもあふへき日な  
れと辛き思ひをなして後まついて行ある云に遠は  
す高山森々として一鳥聲さかす木の下闇茂りあひて夜  
る行かみとし雲端につちふる心地して篠の中踏分く水  
をわたり岩に蹶て肌につめたき汗を流して最上の庄に

出つかの案内としをのこの云やう此みち必不用の事有  
り恙なうをくりまいらせて仕合したりとよるこひてわ  
かれぬ跡に聞さへ胸と、ろくのみ也  
尾花澤にて清風と云者を尋ぬかれは富るものなれども  
志いやしからず都にも折くかよひてさしかに旅の情を  
も知たれば日頃とくめて長途のいたはりさまくにもて  
なし侍る

涼しさを我宿にしてねまゐるなり

遠出よかひやか下のひきの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

れくのはろ道

蠶飼する人は古代のすかた哉

曾良

山形領に立名寺と云山寺あり慈覺大師の開基にて殊清  
閑の地也一見すへきよし人々すくむるに依て尾花澤よ  
りどつて返し其間七里はかり也日いまた暮す麓の坊に  
宿かり置て山上の堂にのほる岩に巖を重て山とし松柏  
年舊土石老て苔滑に岩上の院に扉を閉て物の音きみね  
を岸をめぐり岩を這て佛閣を拜し佳景寂莫として心す  
み行のみをほゆ

閑さや岩にしみ入蟬の聲

最上川のらんと大石田と云所に日和を待爰に古誹諧の

最上川

種こほれて忘れぬ花の昔をしたひ芦角一聲の心をやは  
らけ此道にさくりあしつて新古ふた道にふみまよふと  
いへどもみちしるへする人しなければとはりなき一卷  
殘しぬこたひの風流爰に至れり

最上川はみちのくより出て山形を水上とすこてんはや  
ふさなど云をろろしき難所有板敷山の北を流て果は酒  
田の海に入左右山覆ひ茂みの中に船を下す是に稻つみ  
たるをやいな船といふならま白絲の瀧は青葉の隙くに  
落て仙人堂岸に臨て立水みなきつて舟あやうし

五月雨をあつめて早し最上川

れくのほろ道

六月三日羽黒山に上る圖司左吉と云者を尋て別當代會  
覺阿闍利に謁す南谷の別院に會して憐愍の情こまやかにあるしをらる

四日本坊にをゐて誹諧與行

有難や雪をかほらす南谷

五日權現に詣當山開闢能除大師はいつれの代の人と云  
事をしらす廷喜式に羽州里山の神社と有書寫黒の字を  
里山となせるにや羽州黒山を中略して羽黒山と云にや  
出羽といへるも鳥の毛羽を此國の貢に獻ると風土記に  
侍るとやらん月山湯殿を合て三山とす當寺武江東嶽に

屬して天台止觀の月明らか圓頓融通の法の灯か、け  
そひて僧坊棟をならへ修驗行法を勵し靈山靈地の驗効  
人貴且恐る繁榮長にしてめて度御山と謂つへし

八日月山にのほる木綿しめ身に引かけ寶冠に頭を包強  
力と云ものに道ひかれて雲霧山氣の中に氷雪を踏ての  
ほる事八里更に日月行道の雲關に入かどあやしまれ息  
絶身こゝにて頂上に臻れば日没して月顯れ笹を敷き篠  
を枕として臥て明るを待日出て雲消れば湯殿に下る  
谷の傍に鍛冶小屋と云有此國の鍛冶靈水を撰て爰に潔  
齋えて劔を打終り月山と銘を切て世に賞せらる彼の龍

泉に釧を淬どかや干將莫耶のむかしをしたふ道に堪能  
 の執あさからぬ事しられたり岩に腰かけてしはしやら  
 ふなど三尺はかりなる櫻のつほみ半はひらけるありふ  
 りつもある雪の下に埋て春を忘れぬ遅さくらの花の心は  
 りなし春天の梅花爰にかほるか如し行尊僧正の歌の哀  
 も思ひ出て猶まさりて覺ゆ惣て此山中の微細行者の法  
 式として他言する事を禁す仍て筆をとめて記さす坊  
 に飯れば阿闍利の需に依て三山順禮の句々短冊に書す  
 涼しさやほの三日月の羽黒山  
 雲の峯幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな 曾良

羽黒を立て鶴か岡の城下長山氏重行と云物のふの家に  
 むかへられて誹諧一卷有左吉も共に送りぬ川舟に乗て  
 酒田の湊に下る淵庵不玉と云醫師の許を宿とす

あつみ山や吹浦かけて夕すゝみ

暑さ日<sub>を</sub>海に入たり最上川

江山水陸の風光數を盡して今象瀉に方寸を賣酒田の湊  
 より東北の方山を越磯を傳ひいさを踏て其際十里日  
 影やくかたふく頃汐風眞砂を吹上雨蒙臆として鳥海の

山かくる闇中に莫然して雨も又奇也とせは雨後の晴色  
又頼母敷頼母敷と海士の苦屋に膝を入れて雨の晴を待其朝天能  
霽て朝日花やかにさし出る程に象潟に舟をうかふ先能  
因嶋に舟をよせて三年幽居の跡をどふらひむかふの岸  
に船をあかれは花の上こくとよまれし櫻の老木西行法  
師の記念をのこす江上に御陵あり神宮后宮の御墓と云  
寺を干満珠寺と云此所に行幸ありし事いまた聞すいか  
なる事にや此寺の方丈に坐して簾を捲は風景一眼の中  
に盡て南に鳥海天をさくえ其影うつりて江にあり西は  
むやゝの關路をかきり東に堤を築て秋田にかよふ道遙

象潟

お海北にかまねて浪打入る所を汐越と云江の縦横一里  
はかり佛松嶋にかよひて又異なり松嶋は笑ふか如く象  
瀉はうらむか如し寂しさに悲しみをくはゐて地勢魂を  
なやますに似たり

象潟や雨に西施がねふの花

汐越や鶴はさぬれて海涼し

祭禮

象瀉や料理何くふ神祭

曾良

海士の家や戸板を敷て夕涼 みの、國商人低耳

岩上に雌鳩の巢を見て

れくのはそ道

酒田の余波日を重て北海道の雲に望遙々のをもひ胸を  
いたまゝめて加賀の府まで百卅里と聞鼠の關をみゆれ  
は越後の地に歩行を改て越中の國一ふりの關に到る此  
間九日暑濕の勞に神をなやまし病をこりて事を忘るさ  
す

文月や六日も常の夜には似す

荒海や佐渡によみたふ天河

今日は親しらす子しらす犬もとり駒返しなど云ふ北國  
一の難所を越てつかれ侍れば枕引よせて寐たるに一間

へたて面の方に若き女の聲二人計とみゆの年老たるを  
のこの聲も交て物語するをきけは越後の國新潟と云所  
の遊女成し伊勢參宮するとて此關迄をのこの送りてわ  
すは古郷にかへす文したゝめて果なき言傳などしやる  
也白浪のよするけに身をはふからしあさのこの世を淺  
しう下りて定なき契日々の業因いうに拙なしと物云を  
さくく寐入てあした旅立に我くに向ひて行末しらぬ旅  
路のうさあまり覺束なう悲しく侍れは見えかくれにも  
御跡をしたひ侍ん衣の上の御情に大慈のめくみをたれ  
て結縁せさせ玉へどて涙を落す不便の事には侍れども

我くは所々にてとまらざる方をほし只人行にまかせて行へし神明の加護かならず恙なかるへしとて捨て出づる哀さしはらくやまさりけらし

一家に遊女も寐たり萩と月

曾良にかたれば書とくめ侍るくろへ四十八か瀬とかや  
 數しらぬ川をわたりて那古と云浦に出擔籠の藤浪は春  
 ならそども初秋の哀とふへきものをと人に尋れば是よ  
 り五里いそ傳ひしてむかふの山陰にいり海士の苦ふき  
 かすかなれば芦の一夜の宿かすものあるましといひを  
 とされてかゝの國に入

わせの香や分入右は有磯海

卯の花山くりからしか谷をこえて金澤は七月中の五日  
 也爰に大阪よりかよふ商人何處と云者有るれか旅宿を  
 友とす一笑と云ものは此道にすける名のはのく聞えて  
 世に知人も侍しに去年の冬早世したりとて其兄追善を  
 催すよ

塚も動け我泣聲は秋の風

ある草庵にいさなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟



あか〜と日は難面もあきの風

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩す〜き

此所太田の神社に詣眞盛か甲錦の切あり往昔源氏に屬  
せし時義朝公より玉はらせ給とかやけにも平土のもの  
にあらず目庇より吹返まで菊から草のほりもの金をち  
りはめ龍頭に鋏形打たる眞盛討死の後木曾義仲願狀に  
そへて此社にふめられ侍よし樋口の次郎か使せし事共  
まのあたり縁記に見えたり

むさんなや甲の下のさり〜す

山中の温泉に行ほど白根か嶽跡にみなまてあつむ左の  
山際に親音堂あり花山の法皇三十三所の順禮とけさを  
玉ひて後大慈大悲の像を安置し玉ひて那谷と名付玉ふ  
とや那智谷組の二字をわかち侍しとそ奇石さま〜に古  
松植ならへて萱ふきの小堂岩の上造りかけて殊勝の土  
地なり

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す其功有り明に次と云

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるしとする者は久米之助とていまた小童なりかれか

れくのはそ道

父誹諧を好み洛の貞室若輩のむかし爰に來りし頃風雅  
に辱しめられて洛に皈て貞徳の門人となつて世にしら  
る功名の後此一村判詞の料を請すと云今更むかし話と  
はなりぬ

曾良は腹を病て伊勢の國長嶋と云所にゆかりわれは先  
立て行に

行くてたふれ伏とも萩の原 曾良

と書置たり行ものゝ悲しみ残るものゝうらみ隻鳥のわ  
かれて雲おまようかこどし予も又

今日よりや書付消さん笠の露

大聖持の城外金昌寺といふ寺にとまる猶加賀の地なり  
曾良も前夜此寺に泊て

終宵秋風聞やこの山

と残す一夜の隔千里に同す吾も秋風を聞て衆寮に臥す  
明ほの、空近ふ讀經聲すむまゝに鐘板鳴て食堂に入け  
ふは越前の國へと心早卒にして堂下に下るを若き僧と  
も紙硯をかゝに階のもとまで追來る折節庭中の柳散れ  
は

庭掃て出るや寺に散る柳

とりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ越前の境吉崎の

れくのほろ道

父誹語を好み洛の貞室若輩のむかし爰に來りし頃風雅  
に辱しめられて洛に販て貞徳の門人となつて世にしら  
る功名の後此一村判詞の料を請すと云今更むかし語と  
はなりぬ

曾良は腹を病て伊勢の國長嶋と云所にゆかりわれは先  
立て行に

行くてたふれ伏とも萩の原 曾良

と書置たり行ものゝ悲しみ残るものゝうらみ隻鳥のわ  
かれて雲おまようかことし予も又

今日よりや書付消さん笠の露

入江を舟に掉して汐越の松を尋ぬ

終宵あらしに波もはた遠し

月をたれたる汐越の松 西行

此一首にて敷景盡たりもし一辨を加るものは無用の指  
を立るゝか如し

丸岡天龍寺の長老古き因われは尋ぬ金澤の北村といふ  
ものかりそめに見送りて此處迄したひ來る所々の風景  
過さす思つゝけて折節あはれなる作意など聞は今既に  
別に望みて

物書て扇引さく餘波かな

五十丁山に入て永平寺を禮す道元禪師の御寺なり那幾  
千里を避てかゝる山陰に跡をのこし玉ふも貴きゆへ有  
どかや

福井は三里計をれば夕飯したゝめて出るたるかれの道  
たどくを爰に等裁と云古き隠士あり何れの年にか江戸  
に來りて予を尋遙十とせ餘り也いかに老さらはひて有  
にや將死けるにやど人に尋侍れば存命去てそこくと教  
に市中ひろかに引入てあやしの小家に夕貝へちまのは  
にかゝりて鶏頭は、木、に戸ほそをかくすさては此内  
にゐると門を叩は佗しけなる女の出ていつくよりわた

り玉ふ道心の御坊にやあるしは此あたり何かしと云も  
 のゝ方に行ぬもし用あらは尋玉へといふかれか妻なる  
 へしとしらるむかし物語りにかゝる風情は侍れとやか  
 て尋あひて其家に二夜泊りて名月はつるかのみなどに  
 とたひ立等裁も共に送らんと裾をからけて路の枝拆と  
 うかれ立漸く白根か嶽かくれ比那か山高くあらはるわ  
 さむつの橋をわたりて玉江の蘆は穂に出にけり鶯の關  
 を過て湯屋峠を越れば燈か城かくるやまに初雁を聞て  
 十四日の夕くれつるかの津に宿をもとむ今日の夜月殊  
 に晴たりあすの夜もかくあるへきやといへは越路の習

ひ猶明夜の頃晴はかりかたどあるしに酒すゝめられて  
 希いの明神に夜參す仲哀天皇の御廟也社頭神さひて松  
 の木の間に月のもり入たるをまへの白砂霜を敷けるか  
 ことし往昔遊行二世の上人大願發起の事ありてみつか  
 ら草を刈土石を荷ひ泥滓をかはかせて參詣往來の煩な  
 し古例今にたねす神前に真砂を荷ひ玉ふみれを遊行の  
 砂持と申侍ると亭主のかたりける

月清し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたかはす雨降

名月や北國日和定なき

れくのはそ道

十六日空霧たればますほの小貝ひろはんと種の濱に舟  
を走す海上七里あり天屋何某と云もの破籠小竹筒など  
こまやかにしたゝめさせ僕あまた舟にとりのせて追風  
時のまに吹着ぬ濱はわつかなる海士の小家にて佗し法  
花寺あり爰に茶を飲み酒をあたゝめて夕くれのさひし  
さ感に堪たり

寂しさや須麻にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の秋

其日の荒まし等裁に筆をとらせて寺に残す

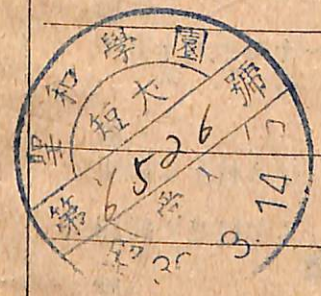
露通も此みなどまで出むかひてみのゝ國へと伴ふ駒に

たすけられて大垣の庄に入は曾良も伊勢より來り合越  
人も馬をとばせて如行か家に入集る前門子荆口父子其  
外したしき人に日夜とふらひて蘇生のものにあふかこ  
とく且悦ひ且いたはる旅の物うさもいまたやまさるに  
長月六日よなれば伊勢の遷宮をかまんと又舟にのりて  
蛤のふたみにわかれ行秋を



奥の細道正誤

冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
冊 九	冊 八	冊 七	冊 六	冊 五	冊 四	冊 三	冊 二	冊 一	丁 十
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二
五	五	五	二	六	一	八	四	六	二



明治卅一年四月十五日印刷  
 明治卅一年四月二十日發行

發行兼印刷人

小國善右衛門

宮城縣仙臺市小田原高松通二番地

發行所

玉田活版所

同縣同市同丁同番地



地百公銅銀卷

卷之十